

まちなか 再生 事業紹介

多様性を楽しめる 「直方らしい」商店街

ふるさと財団では、専門性を持った外部の人材(まちなか再生プロデューサー)が地域に入り、まちなかを再生する事業に対して補助する「まちなか再生事業」を実施しています。この事業では、まちなか再生に関わる様々な分野の専門家であるアドバイザー会議委員が、まちなか再生が行われている現地に実際に赴き、地元自治体やプロデューサー等と一緒にまちなかの状況を確認するとともに意見交換を行う現地会議を開催しています。この会議を通じて、課題や目指す方向性が明確になり、事業をより円滑に進めることができます。今回は福岡県直方市のまちなか再生の取り組みについてご紹介いたします。



チューリップフェア(3月下旬~4月上旬)



のおがた夏まつり(7月下旬)



のおがた
直方市



人口
54,955人
面積
61.78km²

直方市の紹介

直方市は、福岡県の北部に位置し、本市の中央を一級河川である遠賀川^{おんががわ}が流れ、東部には福智山(900.8m)を主峰にその支脈が南北に走っており、豊かな自然に囲まれたハートの形をしたまちです。

本市の中心市街地は江戸時代に福岡藩の支藩である東蓮寺藩(後に直方藩に改名)が置かれ、城下町がつくられたことに始まります。その後、筑豊炭田で採掘された石炭の集積地として遠賀川を利用した水運にはじまり、鉄道輸送の基地となるなど交通の要衝として発展し、その後、鉄工業の町としてもものづくりが発展してきました。

本市を代表する遠賀川^{おんががわ}は、河川敷公園として整備しており、20万球のチューリップを楽しむことができる「チューリップフェア」や「のおがた夏まつり」、音楽イベントなど多くのイベントが開催されています。他にも、「直方オートキャンプ場」や「直方北九州自転車道」が整備され、市民の憩いの場としてはもちろん、市外から多くの来訪者にも親しまれています。

● まちなかの現状と課題

直方市の中心市街地は、JR直方駅を中心に商店街、公共施設などの機能が集約されています。特に商店街は5つもあり、アーケードの総延長は1kmもあります。

商店街は、JR直方駅に隣接し、公共交通の利便性が高く、アーケードが整備されているため、天候を気にせず自由に歩行できるなどの強みがあります。また、市内外からの買い物客で賑わいを見せる『直方五日市』(毎月5日に開催される60年以上続いてきた歴史あるイベント)を始め、「まちを盛り上げたい」と地元の若手を中心となって開催されている『直活祭』、直方市に新しい冬の風物詩をつくりたいとの思



商店街風景

いから開催されている『クリスマスマーケット』といったイベントが民間主導で行われています。

しかし、購買形態の多様化、商店主の高齢化や担い手の不足などにより、商店街の空洞化が進んでおり、商業中心の商店街の振興は難しい状況に置かれています。

● 令和5年度まちなか再生事業の取組

長期目標として、商業だけでなく、本市が持つ文化や伝統、そこに関わる人材といった資源を活かしたまちづくりを民間主導で行うことにより、まちの中心に恒常的な賑わいをつくり、魅力あるまちの創出につなげることを掲げました。そのため、令和5年度では対象エリアの現状把握をすることが重要であると考え、商店街に店舗を構える人やイベントを主催する人といったプレイヤーの考えや関係性を整理し、エリアマネジメントの将来ビジョンを描くことを事業方針として、次のことに取り組みました。

- ①商店街エリア現状把握・分析
- ②まちづくりに関与する関係者の相関整理および人材発掘
- ③商店街エリアの将来ビジョンの作成

● 現地での意見交換

令和5年7月10日にアドバイザー会議委員・プロデューサー・市職員・地元関係者で現地での意見交換を行いました。会議に先立ち、前日に市職員の案内のもと、明治町商店街、須崎町商店街、有楽町商店街、古町商店街、殿町商店街を歩き、



商店街視察の様子



リノベーション店舗の視察の様子



関係者ヒアリングの様子

商店街内にある多世代交流スペース「ここっちゃ」や直鞍ビジネス支援センター「のおがたベース」、リノベーション店舗などを視察しました。

意見交換では、①『既に活躍する多様な人材の個性を生かしたまちづくり推進体制のあり方について』②『まちなかの魅力・求心力について』の2つのテーマについて行い、次のような意見をいただきました。

商店街に関わる方と一口に言っても、空き店舗を有効活用したい人も居れば、新たな事業を起こしたい人、店舗を営業しているが、今後の営業に悩んでいる人など、様々な立場の人がいて、それぞれの層に整理する必要がある。

直方市の商店街に集い、面白いことにチャレンジしたいと思ってもらえるような緩やかなネットワークを形成できるように行政や地域の中心人物がサポートしていくことが大事である。

アーケード商店街の空間自体に直方らしさの魅力がある。新たに魅力をつくるために、どのような空間にしていきたいのか関係者間で想像を膨らませていき、ビジョンをつくりあげるやり方もある。

いただいた助言を参考に、プロジェクトに取り組みました。

● 今後のまちなか再生事業の取組

直方市では、令和5年度に引き続き令和6年度もまちなか再生事業に取り組んでいます。令和5年度に実施した関係者へのヒアリング結果と、浮き彫りになった課題を踏まえ、次のことに取り組み、魅力ある街の創出につなげていきます。

- ①活用可能な空き物件と、物件を使いたい事業者とのマッチング支援
- ②将来ビジョン「多様性を楽しめる商店街」の実現に向けた社会実験(イベント)の実施
- ③エリアマネジメント構築のための場づくり(トークイベントの実施など)

◎プロデューサーより令和5年度の成果と今後の課題

直方市まちなか再生プロデューサー
株式会社ホーホウ代表取締役 木藤 亮太 氏



「本当に、プレイヤーの数が多いんです、みなさん熱い思いと行動力を持合わせている。」がしかし、「人材相互の関係性が強くなく、バラバラという印象も直方市らしいといえそう。」直方市の中心市街地に対する最初の印象です。

ではプレイヤーたちをつなぎ、コミュニケーションのハブになるような人材、いわゆるマネージャー人材がいたらどうだろうか、そんな思いから令和5年度の事業はじまりました。30名を超えるプレイヤーへ対話型のヒアリングを実施しました。直方市ならではの歴史を編集し、新たな賑わいを生み出したい／アーケードの空間的な魅力を生かしたイベントを実施したい／市外からのプレイヤーもまちに参画できる寛容さをつくりたい／商売だけでなく暮らしや子育てを楽しめるエリアにしたい…などなど。ヒアリングを通して

少しずつ見えてきたのはプレイヤー同士の相関関係やビジョンでした。「ひとつにまとめるだけが答えではない。色んな考えを持った人たちが関係し合っている、多様性を楽しめる商店街。」これこそが直方市らしい、課題解決の方向性のようだと気づきました。そんな未来像を実現するために必要なことは、空き店舗を活用した「何か」をみんなの発想で生んでみよう、プレイヤー人材同士の関わり度合いが増していく中で、マネジメント人材も見つかるのではないかと、というストーリーです。中心市街地にどれだけの空き店舗活用が生まれるか(ポテンシャルマップ)の作成、近年誕生した多世代交流スペース「ここっちゃ」の運営スキームの見直しなどは徐々に進んでいます。今後は動きがどのように持続していくか、直方市に相応しいビジョンを持ち、最適解として変化していくストーリーを見出しながら、挑んでいきたいです。

担当者コメント

直方市産業建設部商工観光課 主事 甲斐 蒼生 氏



事業の対象エリアに属する商店街は、郊外に大型商業施設がオープンした頃から空き店舗が目立つようになり、かつての賑わいは失われている状況です。

このような中でも、民間主導で行われるイベントが開催されるなど、商店街エリアの優位性を活かしてチャレンジする方が増えています。こうした取組みが一時的な賑わいではなく恒常的な賑わいに繋がるよう、エリアの価値を高めることとマネジメントする人材が必要だと考えています。

アドバイザー会議委員の皆様からの助言をいただき、プロデューサーと共に関係者へのヒアリングを通してエリアの現状を可視化することができ、将来ビジョンを打ち立てることができました。一方で浮き彫りになった課題があり、今後は課題の解決に向けて具体的に目に見える形で取り組んでいきます。

直方市アピール

元大関・魁皇の出身地であり、市民に多くの感動と勇気を与えてくれた雄姿を後世に伝えるために直方駅前には大関魁皇像が建てられており、多くの方がこの銅像から元気と勇気を貰っています。また、直方市は歴史の魅力もあるまちです。成金饅頭は石炭産業が栄えていた明治の末に誕生した、「白餡」と「ねじり梅の焼き印」が特徴の100年以上の歴史を持つ直方銘菓です。貞観3年(861年)に境内に隕石が落ちてきたという、目撃記録がある世界最古の隕石が祀られている須賀神社は、知る人ぞ知るパワースポットです。

元大関・魁皇像



直方隕石



成金饅頭



石炭記念館